

文芸

俳句

放哉の咳を集めていつじ雲

池田 逸子

懸大根上総の風に曝しけり

伊藤 敬子

ままならぬ筆の運びや初稽古

伊藤 定男

元旦や真白き護摩札真中に

今関満喜子

百八の煩悩の鐘一つ撞く

魚地 照子

忙しなき日にゆらゆらと冬の蝶

江森 悦子

木曾宿の蜂の子土産冬ぞるる

川島 孝夫

幸せば九十の母へ年始かな

川島 通則

文又と柚子を配ってゆずり合ひ

向後 寛

つわものの眠る靖園寒の月

越川 義則

振り向けば鏡が語る冬化粧

小松 藤男

茶の花や社祓りの塵払ひ

佐瀬 輝夫

大陸のペチカと吾の幼年期

宍倉 道子

初日の出光りに己が身を清め

玉虫 栗扇

注連縄とくぐる朝日のまぶしかり

土屋美枝子

ほつほつと心温もる初便り

土屋 義昭

さすらひの口笛吹いて去年今年

戸村 静華

水平線波静まりて初日待つ

西崎さち子

屠蘇祝う親子三代平和の世

長谷川 正子

新年は大吟醸で祝ひけり

早川 勇

短歌

戸を練ればきびし初霜なべて
白達き山まで凍りて深深

越川 福子

見上げればこうこうと飛ぶ飛行機に
我飛びし頃ふと思ひ出す

鈴木 益郎

道の辺の名もなき草もみどりして
新しき世に生命いとむむ

高梨 キヨ

地に向かひ秘かに調べ奏でぬる
エンゼル・トランペットの淡き紅

八角 三枝

道の辺の小さきお堂の観世音
陽射しが頬に揺れ動きぬつ

西山満里子

勝浦の朝市の媼の呼び声に
吊せる鳥賊を買ひてしまひぬ

青木 秀子

浴道に張り出す榎の枝払い
植木職人の来るを待らぬつ

鈴木まさ子

桃色のダイヤモンドリリー開き初め
反りたる花弁に艶の増しゆく

池田 春江

明けやらぬ庭の竈に薪と焚く
赤あかとして炎が揺るる

押尾 輝子

お正月子なき家にも孫會孫
娘夫婦と集い賑ふ

吉岡 信子

生で聴くハーブの演奏初めての
音の響は神話の世界

田崎 尚美

帰りゆく女孫を見送る夜半の庭
凍り星雲に輝きぬたり

芹川 初子

見るのみの花にはあらず山茶花は
枝から枝へめじろ遊ばす

佐瀬 初音

二歳児は遊んであげると笑いつつ
箱なる家に吾と導く

平山 芳子

倒産やリストラといふ物言ひが
社員のみを強くゆさぶる

島田ますみ

露の曇いまだ幼し散り落葉
そつと彼せて帰り来にけり

齊藤つね子

こうほう博物館 23

京の都から来た土器

平成十六年、栗山川の左岸に広がる芝崎遺跡を発掘して、ある一軒の住居跡から一風変わった器が出土しました。形は胴から底が丸く、口の縁が内側に折れ曲がって、一見したところでは何の変哲も無い甕形の土器です。しかし、色が薄茶色でキメの細かい土で作られていて、この地域で作られたものでないことが予想されました。そこで様々な本を見て、同様な土器がほかで出土しているか調べてみました。その結果、形や表面の整形痕模様が似ている土器が、京都府の長岡京遺跡で出ていることが分かりました。

長岡京と言えば延暦三年（七八四）桓武天皇が平城京から都を移し、また延暦一三年（七九四）平安京に移るまでの、わずかに十年間という短命な日本の首都でした。その十年間の長岡京で使われた甕の形には、他の器とは異なる特徴がありました。その外見上の大きな特徴は、胴から底が丸く、口の縁が内側に折れ曲がり、表面に刷毛でなでたような線と、下部には板目で叩いた痕がある

り、器の色が灰色がかつた薄茶色をしていました。まさに芝崎遺跡で出土した土器が、同じ特徴を持っていました。念のため長岡京のあった現在京都府向日市へ持って行って鑑定してもらったところ、間違いなく当地の土器で、大阪府高槻市で作られた物であるということが分かりました。

このように芝崎遺跡で出土した土器が、遠く京の都からもたらされたものであることが分かり、これによって当地と都との何らかの直接的な結びつきがあった事が推定されます。また時期が限られた土器が出土したことは、遺跡の年代を測る上でも貴重な資料になります。



▲出土した甕形の土器